

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2023 年3 月 NO.230

[もくじ]

- 2～3 入河内獅子舞と高知県立大生との交流…有澤俊明
- 4～5 寿衡を探し続けた四年間…松田雅子
- 6～7 マンガけもの道…久尾さとな
- 8～9 第8回〈山中賞〉が発表になりました…山中由貴
- 10 かるぽーとご近所探訪
- 11 「アンテナ」がっかり名所返上宣言…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団1～2月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「Yayoi」 又川優衣

公益財団法人高知市文化振興事業団

入河内獅子舞と

高知県立大生との交流

有澤 俊明

入河内^{にゅうがうち}は、安芸市の北部に位置

し、かつて旧東川村（東川村は、

昭和二十九年合併によって安芸市となる）の役場が置かれていた地区である。東川地域（旧東川村の地域をいう）は、安芸市の面積の約三分の一を有しているが、その殆どは山林で、合併当時は人口二千五百人を超えていたが、現在は二百人程で、高齢化率七五%を超える地域となっており、入河内では現在四十数名が生活している。地域には、かつて中学校三校、小学校六校があったが、現在は全て廃校及び休校となっており、地域

の教育・文化環境も大きく変化した。

この地域に残る伝統芸能「入河内獅子舞」は、かつての青年団活動等を通じて継承されてきたが、残念ながら後継者がいない。入河内獅子舞の由来は言い伝えによると、今から三百五十年ほど昔、地域に蛇が住みついて悪さをしていたところ、「せんさつま」という偉い「太夫」がいてその蛇を退治したという。その蛇の祟りを鎮めるために獅子舞が舞われ、以降、悪魔祓いとして地域に継がれてきたという。

入河内獅子舞は、寝ている獅子

を、両手に「ざい」（刀を意味する）を持った「テガイコ」が起し、獅子とテガイコとの格闘の末、テガイコが獅子を退治するというストーリーで、太鼓の「ドンゴ、ドンゴ、ドンゴ、ドンゴ」、「ドンゴシ、ドンゴシ」という独特のリズムがある。踊りは二通りあり、一つは「襷踊り^{たすきどり}」で、白い襷を獅子とテガイコが引き合いながら激しい太鼓のリズムに合わせ格闘するという珍しい舞であるが、高齢化によって近年披露する機会がなくなっている。現在、引

き継がれているのはもう一つの普通踊りといわれている。周辺の者からは「いなものでござうたぞ！」「ごうたぞ！」「獅子んま、怒った！ 怒った！」などと囃子が入り、演ずる者、見物する者とが一体となって盛り上がったものである。

昭和三十年代の頃までは各家々の庭で舞いを披露し、酒などを振る舞われてその家の安全を祈願したが、時代の流れの中で、家々の玄関前で獅子頭をガツガツとして悪魔祓いを行う「頭入れ」を行い、宵祭りに舞いを披露するのみとなっていた。幼い子たちは、獅子に頭を噛んでもらうと邪気払いとなり健康な一年を過ごせると言われていた。筆者も、幼少の頃は縁日の出店の楽しみはあったが、獅子の姿が見えただけで怖くて逃げ回ったものである。平成に入ってから青年団活動の解散以降は、神祭当日にかろうじて普通踊りを披露するのみとなった。現在の演者は、青年団が活躍していた頃に小学生の部を作り伝授していた連中であ

る。

地域と県内の大学生との交流は、平成十二年に「東川まちとむらの交流を考える会」（平成二十八年には「東川地域おこし協議会」と組織替えし、平成二十九年に東川集落活動センター「かまん東川」を立ち上げる）が結成され、以降、ユズ取り体験交流、茶摘み体験交流などの交流事業を行うとともに、平成十二年から「ゆずとり援農隊」として県内各大学から学生の受け入れが始まった。特に高知女子大学では大学内に援農サークルが結成されるなどし、今日の高知県立大学（以下、県立大学）に引き継がれている。

平成二十年には高知短期大学で「入河内・丸ごとキャンパス」として二年間地域学習が行われ、「入河内大根」の栽培、収穫、販売にと交流を深め、現在、県立大学の立志社中^{*}のサークル「かんきもん」と入河内大根を通じての交流や、ユズ収穫の援農活動に引き継がれている。

こうした交流の中、平成二十五



奉納舞を披露する県立大生たち

年に県立大学の同サークル「Pシスターズ」と安芸市社会福祉協議会（社協）、東川地区社協合同の取り組みで、東川地域の高齢者の意識調査を二回行い、二十七年にも同調査を実施した。その調査の中で「人口の減少や高齢化」、「買い物や通院に関する悩み」や、伝統芸能の「入河内獅子舞」がすたれていくことへの寂しさなどが出された。これらの対応として二十五年からは学生が地区の敬老会や地区民運動会へ参加し、二十七年

からは入河内獅子舞の継承に一役を担ってくれることになった。

学生たちに獅子舞を伝えるには、まず地元民が舞う映像を参考に事前学習してもらって、ストーリーと独特のテンポを覚えてもらった上で、入河内地区を訪れて直接指導を受ける。その後、太鼓、ざい、獅子等一式を大学に持ち帰り、校内で練習を積んでもらった。獅子頭や太鼓の打ち手は手にマメをつくり、テガイコは中腰で筋肉痛を起こしながら、十一月の秋の船岡神社の祭りには境内でその舞を披露している。祭り当日には、獅子舞の奉納舞の見学に訪れる地区出身者や地区民もいて、学生の獅子舞にも大きな期待と元気をもらっているところである。そして、獅子舞の奉納舞を済ませた学生は、地域女性の作った田舎寿司をいただきながら地域の人たちとの交流を行い、学生たちにとっても貴重な社会体験となっていると思われる。

こうした一連の活動は、今日、県立大学の地域学の実習の場へと

つながり、学生と地域との交流が深まっている。

もはや、地域住民の力だけでは集落の再興は難しいが、学生や地区外の人々との交流を通じて元気をいただき、ユズ栽培農家の地区出身者たちとの共同で、地域文化を守り、地域の存続につながることを心から願う。

※立志社中

高知県立大学独自の学生プロジェクトで、地域の課題解決に向けて地域の方と協働して主体的に取り組む学生の活動に対し、大学がその活動資金等の支援を行う。

ありさわ としあき

一九五〇年 安芸市生まれ。

安芸市役所を二〇〇七年退職。

現在は農業（ユズ栽培）。

安芸市社会福祉協議会評議員。

東川地域おこし協議会、集落活動センター「かまん東川」、入

河内大根のこそう会、東川山里

地区社協等でも活動している。

寿衛を探し続けた四年間

松田 雅子



世界的な植物学者、牧野富太郎の妻である寿衛は、どういう人物だったのだろう。もちろん、会ったことも話したこともないので、想像するしかないが、「夫の才能を信じ、その背中を見ているうちに、また植物の保存を手伝っているうちに、植物学に対して同志のような価値観を持つようになり、一緒にその夢を叶えるため、博士を支え、励まし、身を粉にして働いてきた人」なのではないかと私は思っている。

富太郎の壮志は「日本のすべての植物を明らかにする」というものだった。しかも、一つひとつの草花を植物標本にして保存するだけでなく、驚くほど緻密に描写し、調査・研究する努力を惜しまなかった。「時間的にも経済的にも無理に決まっている」普通の女性であれば、まず添い続けることはできなかつたと思う。富太郎の子孫が現在も彼の志を大切に受け継いでいることから分かるように、

寿衛は子どもたちに対しても、父親の志を伝えていたに違いない。ある意味、富太郎と同じスケールの大きさと懐の広さを持った女性だったのではないだろうか。

二〇一八年、私は寿衛をテーマに『スエコザサ』という歌を作った。私は高知が大好きで、高知の魅力を発信するためにこれまであらゆるPR活動を行なってきた。十二年間にわたり映像と音楽のコラボレーション作品を発表（毎年一曲）（当地ソングを制作）、土佐文旦アンバサダー、「はりまやStory」「文旦ムキムキ通信」「牧野人」の発行に携わるなど、これまでたくさんの方にご協力いただき、現在も様々な魅力を発信している。

その活動のひとつとしてここ何年かは、土佐の偉人の陰にこの女あり、というテーマで「武市半平太の妻・富」や「野中兼山の娘・婉」を題材にした音楽制作に向き合っ

てきた。そしてこのテーマの締めくくりは「牧野富太郎の妻・寿衛」にしようとい前から決めていたのだ。

私が風呂の中で歌ったような『スエコザサ』のデモテープは、その後、高知が誇る音楽家である松居孝行先生に編曲していただき、なんと牧野博士のご子孫が偶然校正してくださるなど、あまりにも運命的な偶然と不思議な縁に導かれるようにして完成した。この縁の話についてはあまりにも多岐にわたり、ここでは書ききれないので、ブログの記事*にまとめさせていただいた。

この歌を作るにあたって、まず読んだのが大原富枝の『草を褥に』だった。実は正直なところ、寿衛が気の毒すぎて途中で読むのを止めてしまっている。それでも、「なんで寿衛は富太郎から離れんかったがやろう？」と問い続けた時にできたのが、この歌だった。歌詞に書いたように「あなたの笑顔をみていたら私は今を超えられる」「それでもあなたが愛してくる」という思いが根底にあったからではないかと。

それが次第に確信へと変わっていったいくつかの出会いがあった。まず、朝井まかて著『恋歌』（第百

五十回直木賞）との出会いだ。寿衛について直接書かれているわけではないが、寿衛が彦根藩主井伊家の臣、陸軍省宮繕部元勤務の小澤一政の娘だったことから、この時代の彦根藩や水戸藩の様子を知り、「寿衛の我慢強さのDNA」を垣間見た気がした。また、牧野植物園で開催された朝井氏の講演会で聞いた次のような言葉もそのひとつだ。

「牧野富太郎という人は、どんなに大変でもなんとかなるろう」という人ですよ。実際には、なんとかならない、わけです。周りが、なんとかするしかない。中略「妻の寿衛さんの場合、一緒に暮らし始めた頃は、牧ちゃん（牧野富太郎）が頼りの可愛い女の子でした。しかし、次第に彼を支える芯の強い女性へと変わっていく。富さんを囲む人の中では最も成長した人だったのではないのでしょうか。最後まで富さんに恋をしていたからこそ、尊敬していたからこそ私は思います」

そして、二〇二二年十月、寿衛のイメージを決定づけた、舞台「牧野富太郎伝 草木の人」に出会うことができた。牧野博士のふるさと佐川町で開催された生誕百十年イベントの参加作品であり、地

元からも多くの方が出演していた。当初昼の部だけの予定だったが、チケット完売につき、急遽夜の部が追加上演されることになるほどの人気だった。佐川町からの参加者を含め、出演者のうち約半数が初めて舞台に立たれた方だったが、地元民ならではの富太郎に対する思いが溢れる渾身の演技を、ベテランの役者達がしっかり包んだ、見応えのある舞台だった。

同志として富太郎を支え続けた妻・寿衛の働きと、博士の才能を認めて援助の手を差しのべた人々のおかげで、一家は苦境を脱し、大正十五年には東京の大泉に居を移すことができた。寿衛が「ここに立派な植物標本館を建て、牧野植物園をつくりたい」という夢を語り、博士を励ます場面を観た時、ようやく「寿衛さんに会えた」ような気がして、いろんなことが腑に落ちたのだ。

『スエコザサ』は、二〇一八年四月に開催した牧野博士の生誕百五十六年を祝う「プレ生誕祭」で初披露させていただいた。このイベントは、牧野博士の残した計り知れない功績と博士の存在をもっと多くの人に知ってもらいたいと願う有志らが開催したものだが、私もその一員として会議に参加し、



舞台「牧野富太郎伝 草木の人」の一場面より

チラシ制作や告知協力などをさせていただいた。後に、新しい形で「朝ドラに牧野富太郎を」の会が発足。皆でドラマの実現に向けて奔走した。『スエコザサ』も、佐川町や五台山の観月会、越知町立横倉山自然の森博物館など牧野博士ゆかりの場所で開催し、多くの方に聞いていただくことができた。そして二〇二二年二月、ついにNHK連続テレビ小説「らんまん」の放送が決定。同年の十二月に自由民権記念館ホールにおいて「Thanks for MAKINO」4年間に感謝！スエコザサ&リトルミュージカル『MAKINO II』フィルム上映会（思い出がかり主催）を開催させていただいた。

二〇一八年からの四年間、「朝ドラなんて夢のまた夢」と言われる中、牧野博士の認知度を高めるためにご尽力くださった方々、署名活動を盛り上げてくださった方々と一緒に夢が実現できた喜びを分かち合いたいと、「四年間の記録をまとめたドキュメンタリー」「スエコザサライブ」「リトルプレイヤーズシアターミュージカル『MAKINO II』フィルム上映会」の三つでひとつのイベントとなるよう企画させていただいた。花東贈呈は、この四年間、ミュージカル『MAKINO』、『MAKINO II』と二回の上演で署名活動を盛り上げてくださったリトルプレイヤーズシアターの卒業生が担当してくださった。佐川町のさくらの森学園の子どもさんがデザインしてくれた草花の妖精の衣装が最高に可愛らしく、感動的なセレモニーとなった。

そして、今年の二月には、寿衛が頑張って居を構えた東京都練馬区立牧野記念庭園での念願の演奏を、動画で配信させていただけることになった。

これからも頑張って、音楽で牧野夫妻を顕彰してけたらと思う！

『スエコザサ』

あなたの笑顔を見ていたら私は「今」を超えられる

咲かせてください夢の花
横倉山を思い出し

スエコザサ サワサワと

風に吹かれ ちぎれそうな心

それでも一人 抱きしめた

作詞・作曲 松田雅子

編曲 莉燦馮

（一番のみ抜粋）

■二〇一八年十二月の佐川町での演奏の動画（二胡／松居孝行、ギター／佐伯北斗、歌／寿美玲子）



※ブログ「まんぼな毎日」

スエコザサができるまで

(<https://mnbo2.exblog.jp/29851817/>)

まつだ まゆみ

一九六二年 高知県生まれ。

大阪芸術大学クラシックデザイン科卒業。二〇〇四年、子育てが一段落して取材＋編集＋出版業務を扱う「アトリエよくばり子リス」を設立。

マンガけもの道

久尾 さとな

「よう頑張りました。あとは、なるようになるさね」

ふと思い出すこの言葉。

末期癌で亡くなる直前の父に、担当医がかけたものだ。このようになるゝは多分、私に一生ついてまわる言葉だろう。

色々な御縁がつながって、今回ここに自分のことを書く機会をいただいた。商業誌で漫画家デビュー。受賞歴や掲載経験はあるものの、現在はアルバイトをしながら創作活動中。少しでも気になった方は「久尾さとな」で検索していただけると嬉しいです。

本が好きな父の影響で、自然と漫画の読み方が身についていた。絵を描く事も好きだったので、小学生の頃から漫画家になりたいと

周りには言っていた。自由帳にキヤラクターやネタを書く、皆が笑ってくれた。嬉しくて楽しくてたまらなかった。あがり症で自己主張が苦手な私の唯一のコミュニケーション手段だったのだ。

中学校の三者面談、高校、専門学校、漫画の師匠、アルバイトの面接、そして私の甘い理想を打ち砕いてくれた編集者の目の前で涙目になりながらも言っていた。

「漫画家になります」

結果的に夢は叶った。二十九歳で遅めのデビューをし、完全に戦力外になるまで約七年間、商業誌にしがみつく事ができた。

同年代からすれば、マイペース過ぎる人生に違いない。そして、私は今、何を思っているのか…。

——後悔はない。

ただ、その一言だ。なぜなら当時、短期のアルバイトを組みながら、在宅で好きな仕事ができるのが、家族にも自分にも都合が良かったからだ。

デビューした頃から、高齢の愛犬一号の介護が始まった。認知症、頻度が高くなるてんかん発作。毎日、決まった時間に薬を飲ませる必要があった。副作用と高齢で体が不自由になった家族のそばにいたかった。一号を看取った日は締切のある原稿も抱えていた。

コロナ禍に父の余命を担当医から知らされ、自宅で緩和療法と介護に直面した時も、同時期に高齢で体が不自由になった愛犬二号の介護の時も、私はペンを握ってい

た。
我が家から家族が半分、旅立った。

私が商業誌で執筆していた時間は、家族を一番近くで見送った時間でもあった。

別れだけではなく、素敵な出会いもあった。

私の拙い絵やネタを楽しんでくれた友達。間接的な繋がりではあるが、高校の先輩の県出身漫画家大先生達。漫画制作の現場に受け入れてくださった師匠。漫画家として私を扱ってくださった各出版社の編集者の方々。漫画、お笑い、演劇等、あちこちの人達と話す機会もいただいた。

最初は、何かネタや勉強になるかもしれない、という動機や焦りがあった。あったんだけど、正直に言わせてほしい。

——めちゃくちゃ楽しい(笑)

すっかりこの人達の才能や人間性に魅了され、夢中になってしまった。人生でこんな出会いがあるなんて、本当にありがたい。

競争の激しいエンタメ業界に身を置きながら突出した特技を持つ

わけでもなく、さらにコミニケーションが下手な私にとって、漫画どころか人生は「けもの道」だったからだ。

二十一歳の時、一年間のアシスタント契約が満了し、漫画の師匠の下を卒業した。描くだけではなく、色々な経験をするように言われた。約束と言えば大袈裟だが、無理のない程度に今もそれを心にかけている。人生の先輩でもある師匠はあの時、この後の展開を見抜いていたようだ。

初めて東京で編集者に作品を批評してもらった時、こちらが黙っていても才能を見染められてトントン拍子で……とは、いかなかった。面会開始から十五分でサヨウナラ。ずっと受け身で生きてきた世間知らずで、雑談すらできない人間に、東京のしかも第一線にいる社会人相手に営業の話などできるわけがなかった。若さが売りの二十代前半なのに、地元のアルバイトの面接もいくつか落ちた。初めて採用された所では、仕事も人間関係も失敗続きで、完全に自信をなくしていた。ひとつのことしかできない

い馬鹿じゃないんだからさ、と上司は呆れていた。夜中に涙が止まらなくなり、消えてしまいたいと何度も思った。

三カ月後、私は再び東京の同じ出版社を訪ねていた。皮肉な事に、夢に生かされていた。そして、帰る場所を与えてくれた家族がいた。その出版社ではデビューできなかったが、約五年間そこに通い続け、最終候補賞をいただいた。

とにかく自分を変えたかったし、今の自分が昔よりは少しでも良くありたいと思っている。

絵やストーリーの技術はもちろん、人間としても。今よりも十五キロ太っていた体型を変え、服装

を変え、話し方やリアクションを変え、漫画のジャンルまで変えた。最初のアルバイトを辞めた後は、深夜に年賀状を内務区分したり、二、三十キロの荷物を運んだり、百貨店で学生服を売ったり、早朝からクリスマスケーキをデコレーションしたりと様々なことを経験し、できる限り行動した。

行動した後は、なるようになるしかない。それまでだ。開き直っている今は、肩の力が抜けて、とても過ごしやすい。

父の遺品に、一九六八年発行の漫画家入門書がある。もしかしてお父さんは漫画家になりたかった？ 結局聞かなかったけど。



遺伝上、私の寿命は九十歳を超えるかもしれないし、そうじゃないかもしれない。その時、私の周りに誰がいて、どんな世界が広がっているのだろう。良いのか悪いのか、全く見当がつかない。しか

もこの原稿を書いている時に編集者の方から約一年ぶりに電話がかかってきた。他の作家さんの代理原稿で、未掲載のデビュー作が雑誌に載る可能性が出てきた。

自分の力が及ばないものは、もう流れに身を任せる。なるようになるしかない。でも、後悔しないように悪あがきはする。

さらに欲を言えば、人生楽しい方が良いな。

ひさお さとな

一九八七年 高知市生まれ。
追手前高等学校卒業。短編小説、ホラー漫画等、ペンを握ってウロウロする人。

第8回〈山中賞〉が発表になりました

山中 由貴

以前にも書いたけれど、わたしは小説を読むのが大好きで、一年に二度、自分自身が読んでほんとうに面白かったと思う本に〈山中賞〉という個人的文学賞を授与している。

一月、第八回目となる〈山中賞〉を発表したので、今回はその〈山中賞〉受賞作品をご紹介します！
ヒューヒュー！

第八回〈山中賞〉国内編は、古谷田奈月さんの『フィールダー』（集英社）。

そして、海外編は、ピップ・ウイリアムズさんの『小さなことばたちの辞書』（小学館）。

そう、今回は国内小説と海外小説、どちらもとても素晴らしい作品と出会い、どうしても一冊に決められずに、二作品同時受賞となりました！ やんややんや！

まずは『フィールダー』。ほんとうに心にぶつ刺さりました。

橘泰介がはまるスマホゲーム「リンドグランド」では今日も、ともにチームを組む仲間たちがにぎやかだ。会ったこともないネット上の仲間とオンラインでつながって協力し合い、モンスターを倒しにいくことが、生きる活力にもなっている。あるときから、そのメンバーのひとりずつねにゲー

ムの世界にログインしている、ソシャゲ中毒の「隊長」のプライベートを知り、橘はいつしか彼をだれよりも気にかけるようになっていた。

また、総合出版社「立象社^{りつしょうしゃ}」で人権問題などをあつかうオピニオン誌「立象スコープ」の副編集長としてはたらく橘は、ある日社内です、担当する執筆者、児童福祉の専門家のスキャンダルを耳にする。さまざまなメディアで活躍する黒岩文子が、ある少女を「触った」というのだ。ときを同じくして届いた黒岩からのメールには、長い長い本人のことばが連ねられていて、彼女いわく、それは性的趣向

による接触などではなく、少女との間に入り組んだ事情があつてのことだという。橘は、同じ出版社内でスキャンダルを報じようとする同期に待ったをかけ、黒岩の力になりたいと奔走するのだが……。

橘の視線をとおして、わたしたちの目の前には多種多様な問題が掲げられる。報道倫理、児童虐待、小児性愛、ルッキズム、ソシャゲ中毒、引きこもり、ネット炎上、希死念慮、ファスト化する社会……。本の元の帯にも書かれている「カオティック・ノベル」のネーミングどおり、さまざまなテーマを盛り込んでどこに向かうのか予想もつかない骨太な小説だ。〈山中賞〉選出を機に、作者の古谷田奈月さんから受賞のことばをいただいた。要約するとそこにはこうあった。

わたしたちは実際に、大混乱のフィールドに生きていて、そのなかで人生のテーマをほんのいくつかに絞ることで自己を保っている。この小説を読み、自分がどの部分

にいちばん関心を持ったかに注目してほしい。混沌から何を選び取るのか。そこそがその人の「正体」なのだろう、と。

わたしがいちばん心動かされたのは、最後の最後に橘がある決断をする場面なのだけれど、じつは冒頭ですでに重要なことばが示されている。「ゲートキーパー」というそのことばをわたしはこの小説で知った。しばらく希死念慮に苦しめられていたわたしは、物語のなかとはいえ橘という人が存在

することが、とても大きな支えになったのだ。橘だけじゃない、「リングランド」でドラゴンを倒しにいく仲間たちの陽気な掛け声が、ずつとリフレインして勇気をくれるのだ。

もう一冊、『小さなことばたちの辞書』も、大好きで大好きでたまらない。

一九世紀イギリスで、何十年にもわたって作られた「オックスフォード英語大辞典」。その辞書を編纂する父親の仕事場である辞書編纂室「スプリクトリウム」で育てられた少女エズメは、あるとき辞書に載るはずのことばが書かれたカードを拾う。そこに記されていた「ボンドメイド(はしため)」という単語が、物語のキーワードにもなるのだけれど、それはぜひあなた自身で見届けてもらいたい。わたしはもう初っ端から、この世界に夢中になってしまった。父親はもちろん、スクリプトリウムで働く編纂者たちや、手紙のやり

とりで父と娘を支える女性歴史研究家のデイト、エズメを小さいころから世話してきた女中のリジー、そしてのちにエズメと恋に落ちる若者……(名前は伏せておこう)。とにかく登場人物がとても素敵で印象的なのだ。

エズメはやがて成長し、男性権威の社会で編まれる辞書には載らない、町の女たちのことばを蒐集していく。そこにはたとえば卑猥とされることばや、よい意味では使われないようなことばもあるのだけれど、それを発する人の経験や心情によって意味を変えるものもある。それを知るたびにはっとさせられるのだ。

女性の参政運動が活発になりはじめ、第一次世界大戦が間近に迫る時代のなか、よろこびや哀しみを経験していくエズメがとても愛おしく、彼女を見守る周囲の人々もみなあたたかい。読むことのしあわせをこんなに感じる読書はなかなかない。ほほえましい場面ばかりではないけれど、読み終わっ

て彼らにもう会えないのがさみしい。もっともっと物語のなかにいたかった、エズメとともにことばの魅力に触れていたかった。そんな名残惜しい気持ちでいっぱいだった。

どちらの小説も、読むことで渦巻く感情や、自分のなかに新たに生まれる意識が、自分も知らなかったつぎの自分にしてくれる。ぜひたくさんの方に届くことを願っている。

えー、本はTSUTAYA中万々店にたくさんございまして、いつでも買いにきてくださいね！
(宣伝)

やまなか ゆき

一九八〇年 高知市生まれ。
TSUTAYA中万々店の書店員
なかしんぶん編集長として
Twitterやっています。
好きな本について喋るときだけ
饒舌になります。



かるぽーと ご近所探訪

高知市文化振興事業団が事務所を置く「高知市文化プラザかるぽーと」。その周辺の気になる企業やお店を訪ねてお話を聞き、地域の魅力の再発見や、かるぽーとを活性化していくためのヒントを探ります。

今回訪ねたのは九反田の「安岡酒店 BUE'S」さん。三代目の博さん・律子さん夫妻が営むお店には所狭しと高知の地酒が並びます。

——安岡酒店さんについて教えてください

この店は大正五年に祖父が開き、父の代、そして私たちと続き創業百七年になります。祖父は室戸市羽根町の出身で、商いをするために高知市へ出てきました。当時は船で物資を運ぶ時代。この店の前の堀川も船の往来で活気に満ちていて店を構えるにはよい立地だったと思います。昔の酒屋は調味料やお米、お菓子や煙草なども売っていて、雑貨屋みたいな感じだったんですよ。

——この周辺を少し歩いていただけでもいくつかの酒屋さんがありますね？

やはりうちと同じ理由でこの周辺に店を構えたのかなと。でも今は閉店しているところも結構あって。昔とは違い、酒屋を取り巻く環境は大きく変化しました。特に酒の販売に関する法律

が変わりスー

パー等でも販

売が可能にな

ったことは、

個人商店にと

って大打撃で

そんな中、ど

の店も存続の

ため試行錯誤

し、店をコン

ビニに変える

所も多かった

し、その店

ならではの

特色を探して

他と差別化を

図ろうとしたり

その時、じゃあうち



お酒と蔵元への愛がふれる手作りマップ

はどうするかと考え、高知の地酒に特化することを選び、今に至ります。——そういった変遷が、今に至ります。とても素敵です

私たちの手作りのもので、県内十九の蔵元の位置とそれぞれの関係者さんの顔写真を載せています。県西から東、海にも山にも蔵元があり、それぞれに様々な特色や物語があります。そして驚くことに、どの蔵元でも、お酒の出来の良し悪しが年によって違うなんてことがほほえない。それだけ皆さんが酒造りに真摯で愛情を込めてやっている。そんなところも高知の地酒がうまい理由のひとつなのかな。うちは東隣に大きなホテルがあり、ありがたいことに県外のお客様も多いので、そういった蔵元の話なども織り交ぜながら好みのお酒と一緒に選ぶこともしげしば。味以外にも色々な側面から高知の地酒の魅力を伝えたいと思っています。

——九〇年代以降、かるぽーと等の大きな建物ができ、お店周辺の風景が大きく変化しました

元々、うちの東隣にあるホテルの所には大きな冷蔵の倉庫が、南西にある高層マンションの所には高知酒造の工場が、かるぽーとの所にはご存じのとおり中央卸売市場があった。それらの移転などで空き地ができ、駐車場等として使われた後、この店を取り囲むように次々と大きな建物ができた。風景は大きく変わったけれど、お店にとっては人が集まる場所ができ地域が活性化することは嬉しかったです。

——安岡酒店さんとは同じ町内仲間、かるぽーと。どんなふうにも思っていますか？

二階にあるスタジオを借りたことがあります。料金が安くとても良いのに、存在を知らないという人が結構多い。大ホールのロビーに主催者がちよつとした飲食を出せるようなカウンターとハイテーブルがあるでしょう。あれも雰囲気がよくて僕は好きですけど活用されているのをあまり見ない。かるぽーとの良いところはいくつもあるのに、施設自体が市民に知られていない印象。せっかくの建物なのに「知らない、使われない」だと、その存在価値が薄れてもつたないなあ。(博さん)

かるぽーとができると知った時、私は完成がとても楽しみで。子どもが小さかった頃はよく遊びに行きました。横山隆一記念まんが館で絵本やまんが

を読んだり、大ホールや北広場での子ども向けイベントに参加したり。私は中央公民館でやっている講座にも時々参加するけど、そのたびに「かるぽーとの中にこんな部屋があるんだ」と驚きます。公民館って平日などはあまり利用が入ってないこともあるんですよ？現実的ではないかもしれないけれど、例えば空いた部屋を子どもたちのために開放するとか、何かの形で施設を有効に使っていく方法がないものでしょうか。(律子さん)

建物の外にある北広場や堀川緑地もすごくいい場所。そういった所も利用することで市内の他のホールにはできない、かるぽーとならではの催しが今後生まれるといいですね。やっぱり地域住民としては、かるぽーとがこの地域を盛り上げてくれるような、わいわいと賑やかな存在に育ってほしいような願っています。

——インタビュールにお邪魔すると、お酒と同じくらい音楽が大好きな博さんが店内に素敵なジャズをかけて迎えてくれました。貴重なお話を聞き、またひとつ、ご近所の大きな魅力を発見できました。ありがとうございます！



「アンテナ」 がっかり名所返上宣言

下尾 仁



思った以上にきれいに頭が仕上がった。さあ、次は胴体部分だ。通販サイトでいい物はないかと検索していると、体がすっぽり入るぐらいの赤いランドリーバックをみつけた。値段もそれほど高くない。これだ！と二つ購入。届くとすぐに底を切り抜き、被ってみた。通りのキャラクターが出来上がってきた。

全てが完成したのは文化祭の二日前。僕が「はりま」で、ゆうやけ君が「やばし」と担当も決まり、文化祭当日を迎えた。はりまとやばしは注目の的となり、たくさんのお客さんに写真を撮られ、しんじょう君ぐらいの人気であった（個人の感想）。

好感触を得た僕たちは、いつ本当の

播磨屋橋が「がっかり名所」だと知った十数年前。頭の中で、がっかりを返上するにどうすればいいのか考えた記憶がある。例えば、播磨屋橋と並んで「三大がっかり名所」と言われる札幌時計台と長崎オランダ坂と三大がっかり同盟を結び、三本の矢的に活動するのはどうか。「はりま」と「やばし」というキャラクターを作って、活動してみてもどうかかと、キャラクターを絵に描いてみたりしていた。しかし、僕が行政に「がっかりを返上しましょう」と提案するのも大きなお世話で変な話なので、頭の中で妄想するだけであった。

「はりまとやばしプロジェクト」が動き出した。

まず頭にかぶる部分をどうやって作るか、YouTubeなどで研究し、とりあえず、直径四五センチほどのビーチボールに水に浸した新聞紙を貼り付け、その上にやわらかめの紙粘土を二センチほどの厚さで塗り、じゅうぶん乾燥させて石膏粘土を塗る。それを紙やすりで削り、丸みを出していくことにした。

頭部分を制作していた時、龍馬デザイン・ビューティ専門学校から、文化祭で二十〜三十分ほどの芝居をやってくれないかとの依頼がきた。文化祭のテーマは「おどろおどろし」という学校中がお化けやモンスターでにぎやかで、ちょっぴり怖いという内容であった。それなら二十分ぐらいのゾンビネタの芝居があるので、やりますと依頼を引き受けた。

催し物の中の「おどろしファッションショー」にもぜひ参加してほしいと言われたので、ならばここで、はりまとやばしをデビューさせようという制作力が入った。



播磨屋橋デビューした「はりま」と「やばし」

播磨屋橋に行くか話し合った。二人のスケジュールが合う、二〇二三年一月三日の十五時に行くことに決定。その日を待った。

いよいよ出陣の日。播磨屋橋の地下通路で衣装を装着、両手に鳴子を持ち登場。正月三が日ということもあり、人通りは多く、道行く人は何だろうという顔で見ていく。僕たちも、怖くないですよと鳴子を振りアピール。すると、次々に人が立ち止まり、写真撮っていいですかと声がかかりはじめた。四十分ほどの滞在で、五十組ぐらいの方々と写真を撮り、播磨屋橋デビューは手応えありであった。

はりまとやばしのテーマは、ズーッと「がっかり」と言われ続けていたけど、もうがっかりと言われるのは嫌だと、橋の欄干が妖精となり、訪れた人々を笑顔にする。時には、変なやつがいるぞと、高知つて変やけど面白いと思っていたきたいのだ。それを目指し、不定期ではあるが播磨屋橋に現れる予定なので、もし見かけることがあれば、やさしく温かい目で見守ってほしい。不快な思いをさせたらごめんなさい。アドバイスなどありましたら、よろしく願います。

しもお ひとし

一九六九年生まれ。

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

1 ～ 2 月の事業から

守銭奴ザ・マナー・クレイジー

佐々木蔵之介主演舞台「守銭奴ザ・マナー・クレイジー」高知公演を一月十四日（土）高知県立県民文化ホール・オレンジホールで開催しました。

この舞台は、あらゆることにお金を出し渋るドケチ親父の主人公を佐々木蔵之介さん（以下、蔵之介さん）が過剰なテンションで演じる喜劇です。ドケチだけならまだしも、息子と恋人を奪い合うなど、やりたい放題の傲慢ぶり。見た目も決して美しいとは言えず、蔵之介さんも「格好良いところは一つもない」とおっしゃっていたほどです。

今回の舞台、役者だけでなく舞台セットにも注目が集まりました。担当したのは、ルーマニア人のドラゴッシュ・ブハジャールさん。舞台上に出てくる屋敷の壁や、玄関を仕切っていたのは、なんとビニール。ビニールに絵を描き、それらに照明を当てることで奥行きを演出し、自由自在に舞台上を動かし場面転換をしていました。終演後、「あんなセツトは

初めて観た！」という声が多く聞かれ、観客に驚きを与えていました。

物語の途中では、蔵之介さんと阿南健治さんがステージから客席に降りる演出もあり、観客の心を掴んでいたことも印象的でした。

高知公演は、本ツアー全体の大千穂楽であったため、役者の皆さんも気合い十分。朝早く劇場入りし、入念にアップする蔵之介さんの姿は印象的でした。終演後は、座長である蔵之介さんから出演者やスタッフの皆さんに御礼の品が配られる和やかな雰囲気のもと、終演後のカーテンコールが他都市より多かったこともあり、「高知のお客さんは本当に温かいね」と出演者やスタッフの皆さんが口々におっしゃっていました。

開催日 一月十四日（土）

会場 高知県立県民文化ホール

（オレンジホール）

入場者数 六四〇名



高知市文化振興事業団

宝くじ文化公演

秋川雅史 夏川りみ「ハートフルコンサート」

ヒット曲『千の風になって』で一世を風靡したテノール歌手・秋川雅史さんと、同じく『涙そうそう』の大ヒットで、日本のみならずアジアや南米でも評価が高い歌手・夏川りみさん、そして演奏はNHK交響楽団のOBを中心に構成されたN響団友オーケストラの皆さんによる、豪華なコンサートを高知市春野文化ホールピアステージにて開催しました。

このコンサートは宝くじの収益金から助成を受け、安価な入場料金でお客さま



をお迎えできることもあり、チケットは発売早々に完売となりました。完売後も多くのお客さまからチケットのお問い合わせをいただいたことから、このコンサートの人気ぶりが窺えました。

公演当日は自由席ということもあり、良い席で見ようというお客さまが開場時間の五時間前から並ぶほどで、お客さまの期待に満ちた空気の中、コンサートがはじまりました。

演奏された楽曲は、おふたりのヒットナンバーはもちろんのこと、往年のポップスから演歌の名曲まで、誰もが知っているバラエティ豊かな曲目が並びました。その楽曲を見事なアレンジで、そしておふたりの個性豊かな歌声で歌い上げ、満員の客席からはアンコールの最後まで大きな拍手が鳴り響く、充実のコンサートとなりました。

開催日 二月十二日(日)

会場 高知市春野文化ホールピア

ステージ

入場者数 四一九名



高知を撮る

第36回写真コンテスト入賞作品

沈下橋の原型と言われている。

「早瀬の一本橋」

(平成30年4月18日 本山町吉延)

小松 将勲

昔はやった歌をカバーし、再び人気になっていくという話を最近よく聞く。昔というのは、一九七〇年代から九〇年代。地上波はこぞって歌番組を企画し、流行歌が日本を席巻していた時代である。

高知でも、歌って走ってキャラバン、長崎歌謡祭高知予選、のど自慢など複数あり、知人が出ると応援にも力が入った。

「歌って走ってキャラバン」の二代目の司会者だった私は、この番組の成り立ちや草創期の苦労をベテランスタッフからしつかりと受け継いでいた。高知で二番目に開局した放送局と地域を結ぶための手段として、当時はやり始めていた「カラオケ」、つまり素人さんに歌ってもらって新局を覚えてもらい親しみをもってもらいたいと始まった番組である。

当時は、まだカラオケセットなどではなく、アコーディオンの伴奏で歌っていた。私が司会をしていた三十九年余り前も、伴奏の主流はカセットテープだった。県内二十会場、出演者は各会場百人近く。キャラバンの収録日に合わせて地域のお祭りが開催されていることも多く、収録会場

歌番組の変遷



風俗歳時記

には多い時で三千五百人も町民が詰めかけたことも。舞台から見ると、後ろの人たちは豆粒のようだった。時は移り、この番組は、「カラオケ」ナンバー1を決めるようなものに様変わりしていき、今は番組の成り立ちや歴史を知る人がほとんどいなくなった。確かに、上手い人の歌をもっと多く聞きたい気持ちはある。

しかし、元々この番組を支えてきたのは、テレビの存在がまだ特別だった時代の地域住民であり、その一人一人が主役だったことも忘れないで欲しい。この番組自体をカバーして演じてくれる人たちがいるが、是非、草創期の思いも描いて欲しいと願っている。

このところ少し歌番組も盛り返し、何時間もある番組でも視聴者の心をつかんでいるようだ。聞きたい歌は、ダウンロードするのが当たり前になってきた今、家族で同じ歌を聞いて、祖父母や親世代は懐かしく、子どもや孫世代は新鮮な感覚で向き合っているとすれば、歌を聴ける人たちも随分と励みになる。

(立花香)

高知市立中央公民館 リニューアルオープン！

かるぽーと改修工事のため休館していた高知市立中央公民館が、4月1日より再開します。使い勝手はそのままに、一部設備を一新。ぜひご利用ください。

利用申請が
便利に！

窓口、FAXでの受付に加え、インターネットでも
利用申請できるようになりました！

<https://p-kashikan.jp/culport-kominkan/>

空き室状況も
リアルタイムで確認OK！



その他、申請方法について詳しくは、
かるぽーとHP「中央公民館の使用申込方法」をご覧ください。
<http://www.bunkaplaza.or.jp/facility/kominkan/sinsei.html>

【お問い合わせ】TEL：088-883-5061 / FAX：088-883-5069

風伯

なはり線と海

われて、一本早い便に乗ってみる。
海側の席が空いたので、わざわざ座
りなおす。車窓から海をスマホで撮つ
たりした。それを東京の恩師にコメン
ト付きでLINE送信。大量の海の画
像に、あきれたように「道中の報告あ
りがとうございます」と返事があった。
安芸駅のベンチで百円のゆずジュ
ースを飲みながら、昔日に思いをめぐら

友は鉄道で来いと言う。
久しぶりに大学県支部の同窓会に行
くことになった。日中、安芸市内の水
テルが会場。安芸駅からすべらしい。
十一月初旬だが、汗ばむ日になった。
土讃線の朝倉駅から高知駅、そしてご
めん・なはり線へ。なはり線と聞くと
海を思い出す。私の恩師は旅に出ると
き、寄り道を得意とした。私も海に誘

す。私が子どものころ、なはり線は
なかった。旧土佐電気鉄道の線路が安
芸まで来ていて、確かに小学生の私は
宿泊行事で海浜学校前駅まで旧安芸線
に乗った。宿舎では一晩中、波の音が
聞こえていたように思う。
迷ったが、やはり思い切って安芸駅
から海まで歩くことにした。途中、八
幡様に寄ったら住吉神社があったので、
息災のお礼と海に行くお許しを願う。
砂浜に人影かと思ったら、二羽のト
ビだった。何しに来たかにとらまれる
近くに誰もいない広い海岸。波打ち際
で潮水を口に含んでみる。波に洗われ
た小石を一つ、ポケットにしまう。体
力のない私が、ここまでなんとか歩い
てこれたことがうれしかったし、海は
期待以上にすばらしい。
トビたちが大きく羽ばたいて、舞い
上がった。同窓会に、急がないと。

(三)

第93期高知市民の大学 受講生募集！

毎週火曜日と金曜日の夜、かるぽーとに
さまざまな講師をお迎えし、学びあ
う全15回の講座です。

- 時 間 18:30～20:00
- 会 場 かるぽーと 11階大講義室
- 定 員 各コース先着80名
- 受講料 1コース2,800円
両コース一括4,800円
1日だけの受講は各回500円
- 申し込み・お問い合わせ
公益財団法人高知市文化振興事業団
☎088-883-5071
詳細はホームページをご確認ください。

火曜日コース
ロシアのウクライナ侵攻と
危機に立つ世界の今

毎週火曜日・全15回
4月4日(火)～7月11日(火)

金曜日コース
人生100年時代を生きる智慧
未来を支える看護

毎週金曜日・全15回
4月7日(金)～7月21日(金)
※5月5日(金・祝)は休講



今号の表紙

Yayoi

又川 優衣

卒業・別れの季節ということで、これか
ら新しい生活をスタートされる方たちをイ
メージした抽象的なデザインにしました。
これからへの期待・希望を黄色で表し、お
祝いを桜色、これまでの出会い・人との繋
がり・別れへの寂しさを寒色系の色の輪で
表現しました。

(またがわ ゆい) /
龍馬デザイン・ビューティ専門学校1年生)

2023.4.1(土)～5.14(日)

開催時間 10:00～17:30 (最終受付16:30・月曜休館)

会場 第1会場 横山隆一記念まんが館企画展示室

第2会場 高知市文化プラザかるぼーと7階第3展示室

観覧料 一般 1,000円/中・高校生 700円/小学生 400円

※未就学児無料

※65歳以上の方、及び身体障害者手帳(1、2級)、療育手帳、

精神障害者保健福祉手帳所持者とその介護者(1名)は、割引料金(半額)適用

※20名以上で利用の際は団体割引、学校利用割引制度あり

※一般前引500円、団体800円/中・高校生前引350円、団体500円

小学生前引200円、団体320円

※この企画展の観覧券で横山隆一記念まんが館の常設展示もご覧いただけます

※観覧券は一日限り有効

【主催】高知市/横山隆一記念まんが館/公益財団法人高知市文化振興事業団

【協力】スタジオ地図

高知市文化プラザかるぼーとリニューアルオープン記念事業
「竜とそばかすの姫」展
高知への遺産



お問い合わせ

横山隆一記念まんが館 まんが館

〒781-9529 高知市九反田2-1 高知市文化プラザかるぼーと内

TEL:088-883-5029 FAX:088-883-5049

URL: <http://www.kfca.jp/mangakan/>